

## 中・近世移行期の越前和紙に関する一考察

### 越前国今立郡岩本村内田家文書からの分析

本 多 俊 彦・小 島 浩 之・富 善 一 敏

#### はじめに

これまで、文書料紙をその原材料と前近代以前の抄紙技術の歴史から説明するため、湯山賢一氏や富田正弘氏を中心とする研究グループによって、顕微鏡を用いた古文書原本の観察や文書料紙復元実験などが取り組まれてきた<sup>1)</sup>。この研究グループは、料紙の重量や密度、簀目の太さ、糸目幅、板目、紗目などの観察・測定・計測を行い、繊維・非繊維物質・填料を顕微鏡観察するという調査・研究方法を採り、研究を進めてきた<sup>2)</sup>。筆者たちもまた、この手法に学びながら、文書料紙研究を進めているところである<sup>3)</sup>。

ところで、湯山氏は「料紙遺品と歴史的名称上の比較検討は料紙研究の基本でなければならない」と説き、そのキーポイントとなるものに①料紙の材料の分析、②材料を紙漉きのための紙料にする工程の問題、③漉き上げの際の用具と技法の問題を挙げている。そして、これらを念頭におき、「伝来した料紙遺品を対象に検討し、歴史的名称上にみえるものが遺品のどれに相当するのか、という地道な作業」を行うべきと唱えている<sup>4)</sup>。ただ、このような作業を行っていく場合には、歴史的名称と対応する文書料紙を特定し、それを標準データとして研究を進めていく必要がある。その進め方の一つとして、前近代の紙の見本帳などの、素性の確かな未使用古紙サンプル群からのデータ採取がある。これについては現在、公益財団法人サントリー文化財団からの研究助成を受け、鋭意研究を進めているところであるが、これ以外

にも、例えば、紙の産地として知られた地域の紙漉関係者の家に伝来した文書の料紙を検討することも有効な方法と考えられる。

今回、学習院大学文学部の高埜利彦氏のご厚意により、全国有数の紙の産地として知られる越前国今立郡岩本村の内田家文書のうち、織豊期から江戸初期の文書の文書料紙調査を行う機会に恵まれた。後述の通り、内田家は江戸時代、越前和紙をはじめとする諸産物を扱い、手広く商業活動を行なった旧家である。調査対象とした文書9点については、寛文2年(1662)に内田家が名跡を譲り受けた野辺(やべ)家宛てのものが多く、以下、これらの文書料紙の検討などを行ってみたい。

なお、本稿は、本多・小島・富善による分担執筆によるものである。はじめに、第3章、おわりにを本多が、第1章を富善が、第2章を小島が執筆しているが、最終的には本多と富善で全体の調整を行った。

#### 1 内田吉左衛門家と同文書について

最初に、本論文で扱う内田吉左衛門家及び同文書の来歴について、先行研究等からごく簡単にまとめておきたい<sup>5)</sup>。

内田吉左衛門家は、越前国今立郡岩本村(現福井県越前市)の旧家であり、代々吉左衛門または善四郎を称した。岩本村(村高266石弱)は、五箇村(岩本・大滝・不老(おいず)・定友・新在家)の一つとして、近世期に越前奉書を中心とする紙

生産で栄えた村である。初代吉左衛門が、同族で越前国蠟燭司の特権を持つ野辺四郎右衛門尉の名跡を、寛文2年(1662)に譲り受けてから盛んになった。五箇村の紙生産の繁栄時期にその商業経営を拡大し、野辺小左衛門家と共に、別格の大家として村内に重きをなした。

内田家は、18世紀初頭を境に、紙・布・綿・蠟・塩・煙草などの多品種を、地域間・季節間の格差を利用した臨機の販売により高利を得る経営から、江戸や大坂などの都市専門問屋との、紙・布の恒常的大量取引に転換した。この過程で、紙の生産を担う小生産者である漉屋を、原料仕入金の融通を通じて問屋制前貸支配に組み込み下請化した。しかしながら、18世紀中期以降の紙業不況による漉屋への前貸金の回収不能の結果、経営不振に陥り、嘉永6年(1853)に倒産するに至った。

明治以降も内田家は存続したが、十二代当主故内田穰吉氏(経済学博士・富山大学教授・奈良県立短期大学長などを歴任)は、昭和10年(1935)に屋敷を売却し岩本村を去った。その際に、氏は村に関する文書は岩本区有文書に移し、寺に関する文書は成願寺文書に入れたという<sup>6)</sup>。経営帳簿や膨大な土地・金融関係証文類、書状など約5,000点の文書は、同氏の手元に残された。その後、同家文書は東京教育大学及び高埜利彦氏により整理が行われ、学習院大学史料館、同大学大学院人文科学研究科アーカイブズ学専攻に保管されていたが、2018年2月に、現当主の内田宗吉氏の意

向を受けた高埜氏を通して、福井県文書館に移管されたと聞く。

なお、『福井県史』資料編6 中・近世四(福井県、1987年、398～403頁)には、この文書群のうち、今回の調査で実見した9点の文書を含めた12点を「内田吉左衛門家文書」として収録する<sup>7)</sup>。

## 2 料紙調査の結果とその考察

### 2.1 調査の経緯と対象資料、調査方法

本稿で料紙調査の対象として採り上げるのは、内田家文書のうち、蠟燭および鳥子紙生産の許認可に関わるもので、武家より発給された9点の文書である。これらはいずれも、前に触れた『福井県史』資料編6に収載されている。

まず、2017年8月25日に小島と富善が予備調査を行った。その結果を踏まえて同年12月10日に、各文書について外形・表面観察、形状測定、光学観察・測定の各調査<sup>8)</sup>を実施した。調査は高埜氏立ち会いの下で、本多・小島・富善のほか、高島晶彦(東京大学史料編纂所)、矢野正隆(東京大学大学院経済学研究科)、森脇優紀(同)が行った。この調査による結果をとりまとめたものを表1として掲げる。

A欄の番号は、『福井県史』資料編6の文書番号によった。また、B欄からF欄については、文書名・年月日・差出所・宛所・文書の形状という、文書の基本情報を示した。

表1 内田家文書料紙調査結果一覧

A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O
No.	文書名	和暦年月日	差出・作成	宛所	形状	縦 (cm)	横 (cm)	厚さ (mm)	重量 (g)	密度 (g/cm <sup>3</sup> )	裏の目 (本)	糸目幅 (cm)	填料	繊維の種類
1	羽柴秀吉朱印状	天正13年間8月14日	羽柴秀吉	木村隼人佐	折紙	31.4	49.5	0.25	11.0	0.28	21	22	多	楮(杉原紙)
2	木村隼人佐副状	天正13年間8月14日	木村隼人佐	国中在々所々	折紙	29.6	46.5	0.32	12.2	0.28	24	31	多	楮(杉原紙)
3	木村常陸介安堵状	12月15日	常陸	野辺四郎右衛門尉	折紙	31.0	46.0	0.15	6.2	0.29	24	31	多	楮(杉原紙)
4	山田出羽等連署状	11月21日	山田出羽[等四名]	在々所々	折紙	29.9	46.5	0.19	8.2	0.31	24	28	普通	楮(杉原紙)
5	服部正栄安堵状	慶長3年7月20日	服部土佐守正[栄]	野部則右衛門尉 同久蔵 小左衛門	折紙	30.0	45.2	0.15	6.4	0.31	18	30	多	楮(杉原紙)
6	結城秀康黒印状	慶長7年9月10日	結城秀康	鳥子屋才衛門	折紙	37.1	53.8	0.20	24.2	0.61	不可視	28	無	雁皮(鳥子紙)
7	結城秀康黒印状	慶長7年9月10日	結城秀康	蠟燭屋野辺四郎右衛門 同小左衛門	折紙	37.1	54.0	0.18	22.0	0.61	不可視	28	無	雁皮(鳥子紙)
8	結城秀康黒印状	慶長7年9月11日	結城秀康	野辺四郎左衛門 同小左衛門	折紙	37.2	54.0	0.18	22.4	0.62	不可視	28	無	雁皮(鳥子紙)
10	大町親負書状	8月10日	大[町]親負	野部四郎左衛門尉	折紙	31.2	45.0	0.14	4.8	0.24	21	28	多	楮(杉原紙)

このうち、文書名については『福井県史』に従い、それ以外の各項目は原文書と『福井県史』の積文によっている<sup>9)</sup>。なお、[ ] 内は著者による補記である。さらに、G 欄から K 欄は形状測定による結果、およびそこから導かれた数値、L・M 欄は外形・表面観察、N・O 欄は光学観察・測定による結果である。

使用機器とデータの算出方法については、料紙の厚さ (I 欄) の測定には、シックネスゲージ (ミツトヨ: 547-301) を使用し、文書の天・地・袖・奥から各 3 点、合計 12 点を測定した平均値で、小数点以下 3 桁目を四捨五入した。また、重量の測定には、1/100g まで測定可能な重量計 (イシダ: CBII-600) を使用している。また、これらの数値から算出される密度についても、小数点以下 3 桁目を四捨五入した。

繊維および填料の確認には、杉藤の TS-8LEN-100WT 顕微鏡 (ただし接眼・対物の両レンズを被写界深度の深いものに交換している) を使用し、目視観察に加えて、接眼レンズに CCD カメラ (レイマー: WRAYCAM NF500) を取り付けてデジタル画像の撮影も行った。顕微鏡による観察では、原文書の下から有機 EL パネルを使用して光 (透過光) を当てた観察を行っている。また、原文書と顕微鏡の間には、文書への負担を軽減するために間紙を置いた。

なお、後掲表 2 で示す繊維配向性の調査については、高解像度 100 倍レンズを装着したデジタル顕微鏡 (スカラ: デジタルマイクロスコープ DG-3X) により、非接触による観察・撮影を行った。

## 2.2 調査時点における文書の保管状況

内田家文書のうち、今回調査対象とした 9 点の文書については、蓋に「御朱印」と墨書された漆塗りの文書箱に収められていた【図 1】。調査当時、この箱に収められていたのは、『福井県史』に翻刻された 12 点の文書のうち、今回の調査対象で

ある 1 から 8 と 10、およびその他の数点の文書であった。つまり、『福井県史』所掲の 9、11、12

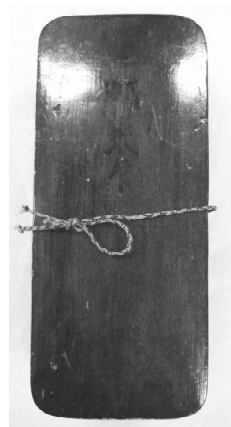


図 1 文書箱

の文書は同梱されていない。

なお、調査時点ではこの文書群の整理作業が進行中であつたため、これら 3 点の文書を別に探し出すことは難しく、今回は調査できなかった。表 1 が文書番号 (A 欄) No.9 のデータを欠くのはこのためである。

表 1 の文書 9 点のうち、No.1 の羽柴秀吉朱印状については、「御朱印」と上書きされた包紙に包まれていた。そして、さらにそれが、銀糸の入った縹子織物でくるまれた状態で、箱の中に収められていた。この縹子織物の写真を関西学院大学の河上繁樹教授に送り、ご教示をいただいたところでは、地緯糸 2 本ごとに銀糸が 1 本入った半越 (はんこし) の銀欄で、16 世紀の明代のものであろうとのことであつた。今後の詳細な調査が望まれよう。

このほか、No.6 の結城秀康黒印状は「鳥子屋才衛門」と上書きされた包紙に包まれていた。また、No.7・8 の結城秀康黒印状 2 通は「福井中納言様御墨印」と上書きされた包紙に包まっている。これら 3 通の結城秀康黒印状は同日付の文書であるが、前者は「鳥子屋」宛て、後者は「蠟燭屋野辺」家宛てと、宛名が異なっており、包紙で別個に保管されていることは非常に興味深い。それぞれ別個の家として存立し、ともに内田家へと継承されたと考えることもできよう<sup>10)</sup>。

## 2.3 文書料紙所見

### ①繊維および填料からの考察

表 1 の O 欄からわかるように、9 点の文書のうち、結城秀康の黒印状 3 通が雁皮紙 (斐紙)、ほ

かは楮紙であった<sup>11)</sup>。また、N 欄からわかるように、顕微鏡観察の結果、楮紙には多量の填料が認められる。図 2 として、No.2 秀吉朱印状の繊維写真画像を提示する。

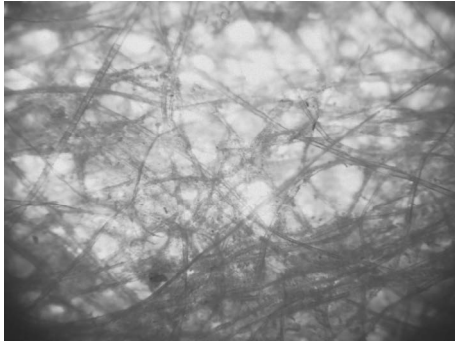


図 2 羽柴秀吉朱印状 (No. 2) 顕微鏡写真 (100 倍)

顕微鏡写真を見ると、楮繊維の周囲、特に繊維と繊維が交差する部分を中心に、小さな粒子がたくさん絡みついて固まっているのがわかる(団粒構造)。個々の粒子は半透明であるが団粒構造を形成すると光を通しにくくなるため、図 2 では繊維と繊維の間に薄黒い影のようになった部分が散見される。こういった特徴的な所見<sup>12)</sup>から、これらは米の粒子だと判断できる。今回調査した全ての楮紙の顕微鏡写真が同様なので、いずれも澱粉粒子(米粉)入りの楮紙だといえる。

文書の保管状況は概ね良好であったが、このように澱粉粒子入りの紙はフケ(毛羽立ち)ややすく生物被害も受けやすい。調査した文書のうち、填料として米粉の入った楮紙の文書にフケや虫損が看取されたのはこのためである。

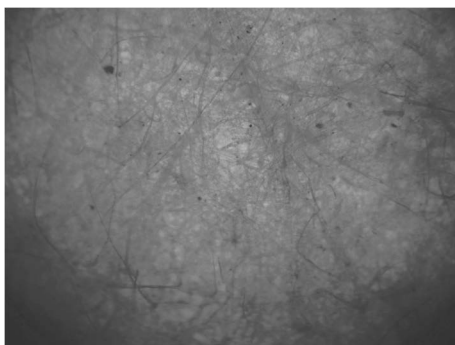


図 3 結城秀康黒印状 (No. 6) 顕微鏡写真 (100 倍)

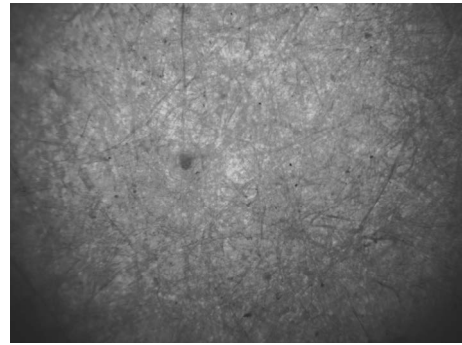


図 4 結城秀康黒印状 (No. 7) 顕微鏡写真 (100 倍)

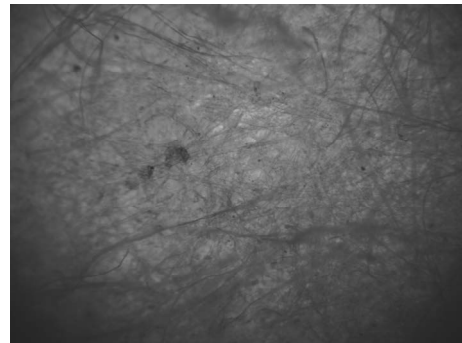


図 5 結城秀康黒印状 (No. 8) 顕微鏡写真 (100 倍)

なお、雁皮紙の 3 通には填料は確認できなかった。これについては図 3~5 として No.6~8 の雁皮の繊維写真を提示する。

ただし、雁皮繊維は扁平で短い形状をしているため、繊維の間隙が詰まっており光が透過しづらく、顕微鏡観察の際に視野が比較的暗くなる。また、米の粒子は表面ではなく繊維の奥の方に見られるため、厚い雁皮の紙は観察しづらいことも多い。このため、正確には、今回の調査要件の中で観察した限りでは填料はとりあえず確認できなかったとしておく。

## ②密度データからの考察

次に紙の密度(表 1 の K 欄)を見てみよう。密度は、重量値と料紙の体積(法量値の積×厚さ平均値)との商である。現代の手漉き和紙の密度は、楮が  $0.30\sim 0.36\text{g/m}^3$  程度、三桮が  $0.4\sim 0.5\text{g/m}^3$  程度、雁皮が  $0.6\sim 0.7\text{g/m}^3$  程度だという<sup>13)</sup>。ただし、密度は填料の有無や厚み、圧搾の際の圧力のかけ方にも左右されるため、これらの値はあくまで参考値である。

今回調査した文書のうち、楮紙の密度は No.10 を除いて概ね  $0.3\text{g/m}^3$  近辺にあり、2 通を除いて  $0.2\text{g/m}^3$  台となっている。大川昭典氏によれば、中世の楮紙は  $0.3\text{g/m}^3$  を切るくらいの  $0.2\text{g/m}^3$  台の紙の密度になっているということである<sup>14)</sup>。これらは、保立道久氏らが示す南北朝期から室町時代の 43 点の楮紙のデータをみても裏付けられ、データからすれば中世では  $0.2\text{g/m}^3$  台前半の楮紙も普通に存在している<sup>15)</sup>。このため、近世初頭においても No.10 のような密度の低い楮紙が存在してもおかしくはないであろう。

他方、雁皮紙の密度は  $0.61\sim 0.62\text{g/m}^3$  となっており、雁皮紙の場合は現代の手漉き紙の標準的な密度とあまり変わらないことがわかる。

### ③ 簀目および糸目幅からの考察

簀目 (L 欄) は 1 寸あたりの本数、糸目幅 (M 欄) は簀を編んだ糸の間隔である。楮紙については、簀目は 18 本から 24 本で、ほぼ 20 本台前半とみられ、糸目幅は No.1 の秀吉朱印状を除いて 30mm 前後である。前述した保立氏らの研究データから簀目が観察できたもの 40 点の平均をとると 15.1 本となる。これに比べると今回の楮紙は簀目がより細かくなっている。今回調査した文書は 9 点と少なく、地域・内容も偏っていることから、保立氏らの大徳寺文書のデータとの単純な比較は厳に慎まねばならない。

ただ一方で、富田正弘氏が古代から近世までの 2,833 件の文書の調査データを解析し、時代が降るにつれ簀のヒゴが細くなっていくこと、特に室町期と織豊期の対前期比での増え方が顕著であることを指摘し、この時期になんらかの抄造技術の改革があったのではないかと推測している点<sup>16)</sup>は、注目に値する。この指摘を踏まえると、今回の調査で得られた 20 本台前半という簀目の数が時代の趨勢と無関係とは言い難いであろう。

糸目幅については、No.1 のみが著しく狭い。こ

のことは、漉き上げに用いる簀が他と異なっていたことを意味する。これが生産地域の違いを意味するのかなどについては、羽柴秀吉発給文書の料紙研究の進展を待ちたい。

3 点の雁皮紙については、簀目は確認できなかった。一般に雁皮繊維の紙は簀に紗を引いて抄紙することが多く、簀目が確認できるのは稀である。この場合は代わりに紗の痕 (紗目) が残っていることもあるが、今回の文書ではこれも確認できなかった。糸目幅については、28mm であり楮紙とほぼ同じであった。

### ④ 繊維配向性からの考察

つづいて、繊維配向性の調査から料紙の特性を考察してみたい。繊維配向性は配向度と配向角度の二要素からなる。配向度は繊維がどの程度整然と配向しているのかの度合いを表し、配向角度は繊維の並んでいる向きを漉き手から見て右手方向を 0 度とし、反時計回りで見たときの角度として表す。繊維の配向角度は、和紙の場合は 90 度付近になっているのが一般的な漉き方であるという<sup>17)</sup>。

また繊維配向度は、1.10 以下ならば「無配向 (繊維配向性が無い)」、1.10~1.20 は「やや繊維が配向」、1.20 以上は「特に強く繊維が配向 (繊維配向性が強い)」とされている。繊維配向度は原則として抄紙の際、簀に面する側 (簀肌面) で高い数値を示す傾向にあり、一般的にはこちらの面をオモテとして書記面とする。このため、配向性を調査することで、紙本来の表裏を把握することが可能となり、料紙の表裏使用の状況を解明する手がかりとなる<sup>18)</sup>。なお繊維配向性の調査およびデータ解析は高島晶彦氏の協力を得た。

以下に表 2 として繊維配向角度と繊維配向度のデータを示す。

表 2 内田家文書の繊維配向性

No.	繊維配向角度		繊維配向度		差分
	書記面	非書記面	書記面	非書記面	
1	92.10938	91.49414	1.301572	1.07107	0.230498
2	93.33984	94.13086	1.297611	1.16434	0.133275
3	92.98828	90.61523	1.087296	1.28432	-0.197024
4	89.47266	93.33984	1.333562	1.13625	0.197308
5	99.31641	95.00977	1.318733	1.16080	0.157933
6	101.07420	89.12109	1.049034	1.17403	-0.124991
7	86.22070	91.23047	1.055536	1.16299	-0.107451
8	86.57227	95.18555	1.107852	1.15003	-0.042179
10	90.17578	85.60547	1.402236	1.16449	0.237742

表中の No. は表 1 に対応する。また、原文書において実際に文字が書かれている面を書記面としている。配向角度については、一部高い値も出ているが、書記面、非書記面ともに概ね 90 度前後であって、和紙として標準的なものであることがわかる。また、配向度については、書記面と非書記面の差分をとってみたところ、4 点がマイナスとなった。「簀肌面＝書記面」および「配向度は簀肌面で高い数値を示す」という原則からすれば、書記面と非書記面の配向度の差分がマイナスになることはない。このため、No.3 と 6～8 の文書については、簀肌面が書記面とならなかったことを示している。

一般には、簀肌面は乾燥の際に干板に接する面となるため、簀肌面側には板目が、その裏面には刷毛目がつくとされる。今回は調査した全ての文書料紙について、文書の書記面に板目が、非書記面に刷毛目が肉眼で観察された。このため No.3 と 6～8 の文書については、板干しの段階で表裏が逆転したものと推測できる。

No.3 の楮紙に関しては偶然ということも考えられるが、No.6～8 の雁皮紙について全て簀肌面と書記面が逆転しているのは偶然とは考え難く、楮紙と雁皮紙で乾燥工程に差があったことが想定されよう。

#### ⑤雁皮紙について

このように、繊維配向性からみた場合、当該地域の雁皮紙の特徴が際立つことが明らかとなった。

雁皮紙には鳥子と間似合という代表的な紙種がある。No.6 が、鳥子屋才衛門に対して鳥子役の免許を与えるものであることからして、ここで使用されている雁皮紙は越前鳥子紙であると推察される。

富田正弘氏によれば、中世の文献における鳥子という名称の初見は、平経高の日記『平戸記』仁治元年（1240）十一月二十日条であり、南北朝時代には史料が少ないが、室町・戦国時代となるに従い史料に頻出するという<sup>19)</sup>。少なくとも文明年間（1469～87）には越前鳥子という言葉もみられ、これが岩本村を含む五箇の地で生産されたのではないかと考えられている<sup>20)</sup>。

内田家文書には鳥子役（No.6）と国中蠟草（No.7）、国中蠟燭司（No.8）の各免許に関する黒印状がみられるが、同時期に大滝村の三田村掃部には奉書紙職の免許が授けられているという<sup>21)</sup>。ここからは、鳥子紙が織豊期においても奉書紙と並ぶ、この地域の代表的な紙種であったことを窺い知ることができるであろう。

今回、実見した 3 点の雁皮紙は、いずれも鶏卵色をしており、固い丈夫な紙<sup>22)</sup>で、細かな外皮系の混入物が全体に満遍なく見られた。湯山賢一氏は「室町後期に盛行する鳥ノ子は、③表皮削りに意図的に甘皮を残すことによって、その色合いを出したものである。室町後期・戦国期に多くみえる鳥ノ子紙の濃い色は甘皮比率の高さに拠る。当然のこととして、塵取りの程度が下がり、樹皮、塵が含まれる特徴をもつに至る。…（中略）…他方、室町中期から従来通りの白皮を生かした紙料調合に填料としての米粉を加えた上質の鳥ノ子間似合が出現する」と述べる<sup>23)</sup>。鳥子と間似合の相違は議論のあるところであるので、ここでは立ち入らないが、色が濃く、外皮が混入し、米粉の見られないこれらの雁皮紙は、湯山氏の論じる室町後期・戦国期の鳥子紙の系譜を引くものだと

考えればよく理解できる。

残念ながら、管見の限りでは鳥子紙に関する史料は少ないため、確実なことが言える訳ではないが、これまでの内容だけから判断すれば、内田家文書の雁皮紙は、標準的な越前鳥子を今に伝える希有な資料といえる可能性が高いであろう。摂津名塩や和泉阿間河といった代表的な近世の雁皮紙の技術的源流は、いずれも越前五箇に発するとされている<sup>24)</sup>から、内田家文書の鳥子紙を基準として、今後のデータの蓄積を継続することで、中世から近世への雁皮紙の有り様をうまく浮かび上がらせることができるかもしれない。

### 3 杉原紙系料紙の検討

前章では、内田家文書所収の織豊期から江戸初期の文書 9 通の料紙調査結果の検討を行った。本章では、これら 9 通のうち、杉原紙系の料紙について、さらに検討を試みる。

我々は今回調査した文書のうち、表 1 の No.1 から No.5 及び No.10 の紙種を杉原紙と判定した。これは、顕微鏡観察の結果、これらの文書料紙が米粉を多く入れた、外皮系異物や非繊維物質の混じる楮紙であったためである<sup>25)</sup>。しかし、同じ杉原紙といっても、そこには少なからず差異もあった。

まず、大きさの点に着目すると、羽柴秀吉朱印状 (No.1) と木村隼人佑副状 (No.2) 以下 5 点とでは、縦寸法は 30cm 前後と同程度であるが、横寸法では羽柴秀吉朱印状が一寸ほど大きい。また、厚さの点においては、羽柴秀吉朱印状 (No.1)・木村隼人佑副状 (No.2) が 0.2mm を大きく超えた厚めの料紙であるに対して、木村常陸介安堵状 (No.3) 以下 4 点は 0.2mm を下回る。このため、これらの杉原紙は大きさ・厚さに関して、秀吉 (No.1) > 木村隼人佑 (No.2) > 木村常陸介 (No.3) 以下というグループ分けをすることができるだ

ろう。

ところで、富田正弘氏によれば、杉原紙は院政期に現れ、鎌倉時代を経て南北朝から急速に流布するとともに、室町中期頃に高品質の御教書杉原を分化したという。そして、杉原紙の中に上中下の品質区分が生まれ、立派な御教書杉原は室町幕府管領奉書に、標準的な御教書杉原は室町幕府奉行人奉書や守護クラスの発給文書に、そして守護代クラスの発給文書には普通の杉原紙が用いられたとしている<sup>26)</sup>。上述の No.1 から No.5 及び No.10 における杉原紙の差異は、まさにこのことと符合するであろう。

例えば、羽柴秀吉朱印状 (No.1) と木村隼人佑副状 (No.2) の料紙の違いは、文書の機能面からも理解できる。

〔史料 1〕 羽柴秀吉朱印状 (表 1 : No.1) 【図 6】

越前国中蠟燭司之儀、野辺四郎右衛門尉仁仰付候之条、可成其意者也、

(1585)  
天正十三

(間)

壬 八月十四日

(羽柴秀吉)

(朱印)

木村隼人佑とのへ<sup>27)</sup>

ここでは、羽柴秀吉によって、野辺四郎右衛門尉が「越前国中蠟燭司」を仰せ付けられている。

次に、この〔史料 1〕を受けて越前府中城主の木村隼人佑が発給したのが、次の〔史料 2〕である。

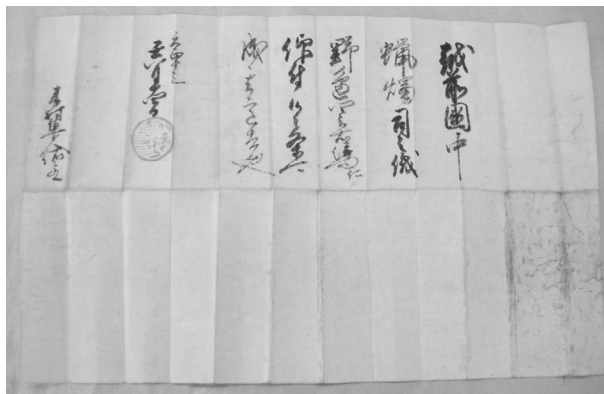


図 6 羽柴秀吉朱印状

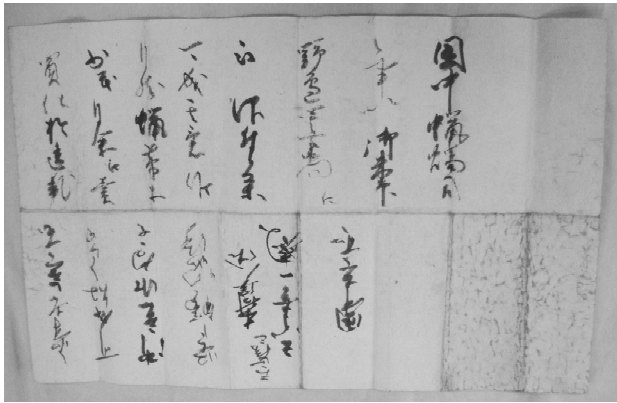


図7 木村隼人佑副状

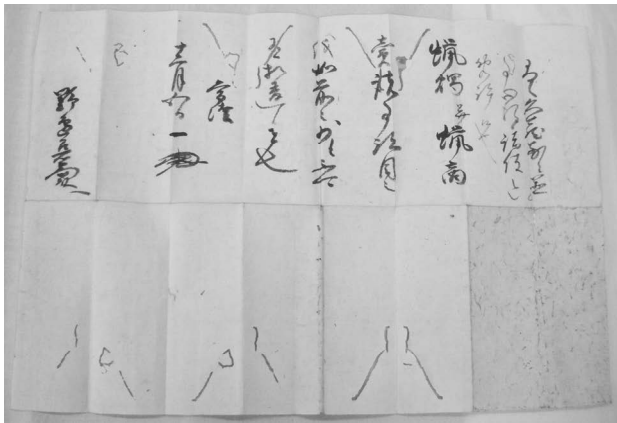


図8 木村常陸介安堵状

〔史料2〕木村隼人佑副状（表1：No.2）【図7】

國中蠟燭司之事、以御朱印、野辺四郎右衛門尉仁被仰付候条、可成其意候、自然、蠟草等少茂自余江売買仕、於違乱之輩者、急度可成敗之旨、御意候、為其、堅申触候、仍、如件、

天正拾三 木村隼人佑  
壬八月十四日 一（花押）  
国々在々所々<sup>28)</sup>

下線部にあるように、〔史料2〕は〔史料1〕の遵行状の役割を果たしている。これは、富田氏の言うところの管領奉書の機能を〔史料1〕が、また守護遵行状の機能を〔史料2〕が、それぞれ担っているといえることができる。

このことは、文書料紙データからも確認できる。富田論文にて例示された長禄3年（1459）の管領

奉書の法量は縦寸法 30.4cm、横寸法は 49.3cm、厚さの平均値は 0.21mm であったが、〔史料1〕羽柴秀吉朱印状（No.1）の法量は縦寸法 31.4cm、横寸法は 49.5cm、厚さの平均値は 0.25mm と近似している。また、守護遵行状の法量は縦寸法 28.3cm、横寸法は 47.9cm、厚さの平均値は 0.17mm であったが、〔史料2〕木村隼人佑副状（No.2）の法量は縦寸法 29.6cm、横寸法は 46.5cm、厚さの平均値は 0.32mm である。厚さの違いが気にはなるが、この点は次の〔史料3〕と合わせて考えれば、近似しているとしても良いのではないだろうか。

〔史料3〕木村常陸介安堵状（表1：No.3）【図8】

尚々、久蔵、別に置候事、心得候、諸役令免許候也、

蠟燭并蠟商売諸事跡目之儀、如前々、少も不可有相違候者也、

常陸

十二月五日 一（花押）

野辺即右衛門尉殿へ<sup>29)</sup>

この〔史料3〕では、下線部にあるように、越前府中城主の木村常陸介が野辺即右衛門尉に対して、〔史料1〕〔史料2〕で野辺四郎右衛門尉に認められた「蠟燭并蠟商売諸事」の跡目相続を安堵した。また、尚々書では、久蔵を「別に置」くことを承認し、諸役も免許している。

野辺即右衛門尉とは、慶長3年（1598）7月20日付の服部正栄安堵状（表1：No.5）<sup>30)</sup>にて屋敷の検地を免除された宛名人の1人、「野部則右衛門尉」と同一人物であろう。この服部正栄安堵状の宛名人は野部則右衛門尉と同久蔵、小左衛門の3人となっている。内田穰吉氏によると、野辺家は「四郎右衛門家」（久蔵）から「小左衛門家」（則右衛門）が分かれたという<sup>31)</sup>。つまり、〔史料3〕は野辺家の分家を示す史料といえることができる。

さて、この〔史料3〕木村常陸介安堵状（表1：



No.3) は、越前府中城主としての安堵状であるから、この木村常陸介と〔史料1〕〔史料2〕の木村隼人佑とは同一人物、もしくは城主の相続関係にある人物と推測できる。今のところ、前者を木村定重、後者をその子・重茲と考えたい<sup>32)</sup>。つまり、〔史料2〕と〔史料3〕が同じ立場の者から発給された文書であるから、両者はある程度同質の料紙が使用されていると推測できる。〔史料3〕木村常陸介安堵状(表1:No.3)の法量は縦寸法31.0cm、横寸法は46.0cmと、〔史料2〕木村隼人佑副状(No.2)に近似しているが、厚さの平均値は0.15mmと薄くなっている。しかし、慶長3年(1598)の太閤検地を機に足羽郡・今立郡を得た服部正栄安堵状(表1:No.5)とは縦横寸法・厚さともほぼ同じであるから、むしろ木村隼人佑副状が厚目となっているのが異例なのかもしれない。

いずれにせよ、以上のように考えると、〔史料1〕羽柴秀吉朱印状(表1:No.1)は立派な御教書杉原、〔史料2〕木村隼人佑副状(表1:No.2)及び〔史料3〕木村常陸介安堵状(表1:No.3)は標準的な御教書杉原と考えられるだろう。

## おわりに

以上、本稿では、越前国今立郡岩本村の内田家文書のうち、織豊期から江戸初期の文書について行った文書料紙調査のデータ分析と検討を行った。今回、織豊期の杉原紙や越前鳥子紙の料紙データが得られたことは、非常に大きな成果であった。今後、前近代の越前和紙を検討していく際の標準データとなるからである。

最後に、今回は詳しく検討することができなかった杉原紙の厚さについて、少し述べておきたい。越前五箇地区で生産される杉原紙については、そ

の厚さが極めて重要な問題であつたらしい。前掲註5の『福井県史』資料編6 中・近世四所収の「三田村士郎家文書」によると<sup>33)</sup>、三田村掃部は織田信長の御用紙漉として奉書紙生産を独占し、その後の領主たちも三田村掃部の権利を安堵した。しかし、掃部の奉書紙に「似せた紙」の密造が露見することが度々あったようである。その際、問題となっていたのが「あつすいはら(厚杉原)」だということである<sup>34)</sup>。このことは、「奉書紙=厚い杉原紙」であることを示唆している。今後、追究されなければならない重要な課題の一つといえよう。

冒頭にも記したが、文書料紙研究では料紙の歴史的名称と文書料紙原本とを同定する作業を行っていかなければならない。本稿が、そのような研究の深化の一助になれば幸いである。

【附記】史料所蔵者の内田宗吉氏、および調査時に史料を管理しておられた学習院大学文学部の高埜利彦氏に感謝申し上げたい。本稿は、2017年度公益財団法人サントリー文化財団「人文科学、社会科学に関する学際的グループ研究助成」による「和紙技術・文化論の再構築をめざして：多言語による記録と伝世資料の比較検討による学際的研究」(代表者：本多俊彦)の成果の一部である。

(ほんだ としひこ：高岡法科大学准教授)

(こじま ひろゆき：東京大学大学院経済学研究科講師)

(とみぜん かずとし：東京大学経済学部資料室特任専門職員)

- 1) 科学研究費補助金(総合研究 A)「古文書料紙原本にみる材質の地域的特質・時代的変遷に関する基礎的研究」(研究期間:平成 4 年度～平成 6 年度、課題番号:04301039、研究代表者:富田正弘)、科学研究費補助金基盤研究(A)「紙素材文化財(文書・典籍・聖教・絵図)の年代測定に関する基礎的研究」(研究期間:平成 15 年度～平成 17 年度・平成 18 年度～平成 19 年度、課題番号:15200058・18200054、研究代表者:富田正弘)、科学研究費補助金基盤研究(A)「東国地域及び東アジア諸国における前近代文書等の形態・料紙に関する基礎的研究」(研究期間:平成 20 年度～平成 23 年度、課題番号:20242016、研究代表者:山本隆志)など。
- 2) 富田正弘「紙素材文化財の料紙判定法について」『紙素材文化財(文書・典籍・聖教・絵図)の年代測定に関する基礎的研究』(平成 15 年度～平成 17 年度科学研究費補助金(基盤研究(A))研究成果報告書、研究代表者:富田正弘),2008。
- 3) 例えば、本多が研究代表を務めた共同研究としては、科学研究費補助金基盤研究(B)「近世文書料紙の形態・紙質に関する系譜論的研究」(研究期間:平成 25 年度～平成 28 年度、課題番号:25284129)や東京大学史料編纂所「日本史史料の研究資源化に関する研究拠点」一般共同研究「織豊期の文書料紙の形態・紙質について—前田家関係史料を中心に—」(研究期間:平成 27 年度～平成 28 年度)、公益財団法人サントリー文化財団:人文科学、社会科学に関する学際的グループ研究助成「和紙技術・文化論の再構築をめざして:多言語による記録と伝世資料の比較検討による学際的研究」(研究期間:平成 29 年度)がある。
- 4) 湯山賢一「我が国に於ける料紙の歴史について—「料紙の変遷表」寛書—」同氏著『古文書の研究—料紙論・筆跡論』青史出版,2017(のち、湯山賢一編『古文書料紙論叢』勉誠出版,2017 に掲載)
- 5) 以下、内田吉左衛門家及び同文書についての記述は、高埜利彦「幕藩制中期における生産者支配の一形態」『日本歴史』354,1977、同「近世中期における商業経営の変質」『学習院大学文学部研究年報』29,1983、同「和紙」『講座・日本技術の社会史』第一巻 農産・農産加工,日本評論社,1983、『福井県史』資料編 6 中・近世四,福井県,1982、『岡本村史』本篇,岡本村史刊行会,1956、による。
- 6) 内田穰吉「十六世紀から二十世紀へ:ある小土豪の盛衰」『福井県史しおり』資料編 6 中・近世四,1987。
- 7) また、福井県史編纂時に撮影されたマイクロフィルムの写真帳 82 冊(2,679 件)があり、福井県文書館で利用が可能である。「福井県文書館・図書館デジタルアーカイブ」<http://www.archives.pref.fukui.jp/archive/detail.do?id=291785&smode=1> (2018.03.05 アクセス)を参照されたい。
- 8) こういった料紙調査の概要については、天野真志・富善一敏・小島浩之「近世商家文書の料紙分析試論:武蔵国江戸日本橋白木屋大村家文書を例として」『東京大学経済学部資料室年報』7,2017 および本多俊彦「文書料紙調査の観点と方法」小島浩之編『東アジア古文書学の構築:現状と課題』東京大学経済学部資料室,2018 を参照。
- 9) なお、筆者たちの原本確認の結果、修正すべきと考えた点については、第 3 章にて後述する。
- 10) 鳥子屋才衛門については、管見の限り、他に史料も研究もなく、どういった人物であったかは不明である。高埜利彦氏に直接伺ったところによれば、鳥子屋の名跡は野辺家に受け継がれた後、内田家へと継承されたため、その文書もまた内田家に伝来することになったのではないかとのことであった。
- 11) 繊維の識別については、大川昭典「文書紙の繊維組成及び填料の観察」(湯山賢一編『古文書料紙論叢』勉誠出版,2017)に基づき、宍倉佐敏『和紙の歴史:製法と原材料の変遷』(印刷朝陽会,2006)、園田直子「素材としての和紙に関する基礎的研究」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第 57 集,1994)も参考とした。
- 12) 填料としての米粉粒子の顕微鏡による見え方の特徴は、前掲註 11 大川「文書紙の繊維組成及び填料の観察」を参照。
- 13) 大川昭典「古代の製紙技術」湯山賢一編『文化財学の課題:和紙文化の継承』勉誠出版,2006、および大川氏からの直接のご教示による。
- 14) 前掲註 13 大川「古代の製紙技術」162 頁では、「中世文書などと現在の紙の密度を見てみますと、かなり中世文書の方が低いようですね。今言いました〇.三五とかという数字ではなくて、〇.三ちょっと切るくらいの、〇.二台の紙の密度になっていて非常に柔らかい。多分、紙を乾燥させる前のプレスとか、そういうものが違うのではないかと思います。」と述べている。大川氏は楮紙とは明言していないが、その前々段で現代の楮紙の密度が  $0.35 \text{ g/m}^3$  前後であることを受けての文脈なので、楮紙の密度のことを述べていることは間違いないだろう。
- 15) 保立道久[ほか]「編纂と文化財科学:大徳寺文書を中心に」(『東京大学史料編纂所紀要』23,2013)末尾の図 1 には大徳寺文書の調査による南北朝期から室町時代の料紙 48 点の詳細な観察・測定データが示されており、このうち 43 点が楮紙で密度データのあるものとなっている。
- 16) 富田正弘「調査データの概要」『古文書料紙原本にみる材質の地域的特質・時代的変遷に関する基礎的研究』平成 6 年度科学研究費補助金(総合研究 A)研究成果報告書,1995。
- 17) 韓允熙・江前敏晴・高島晶彦「繊維配向性分析による大徳寺文書料紙の抄紙技術の推定」『情報考古学』16-2,2010。
- 18) 高島晶彦「デジタル機器を利用した古文書料紙の分析」『古文書研究』80,2015、前掲註 8 天野[ほか]「近世商家文書の料紙分析試論」。
- 19) 富田正弘「文献史料からみた中世文書料紙の体系と変遷:檀紙と強杉原」『古文書研究』80,2015。
- 20) 前掲註 5『岡本村史』76～79 頁および『今立町誌』第 1 巻本編(今立町役場,1982)447～448 頁。

- 21) 『福井県史』通史編 3 近世一, 福井県, 1994, 126～127 頁。
- 22) No.6 から 8 の雁皮紙は、四隅に干皺、押痕、小穴などが確認された。具体的には No.6 では料紙の四隅に干皺と小穴が、No.7 では袖側の二隅に押痕、奥側の二隅に干皺が、No.8 では四隅に干皺がはっきりと見られた。厚手の雁皮紙を板干する際に、楮紙以上に強い力で抑えたり、ピンのようなものを使って干板に止めたりした痕跡だと考えられる。
- 23) 前掲註 4 湯山「我が国に於ける料紙の歴史について―「料紙の変遷表」覚書―」同氏編『古文書料紙論叢』勉強出版, 2017, 22 頁。
- 24) 寿岳文章『日本の紙』吉川弘文館, 1967, 269 頁。
- 25) 紙種の判定方法については、前掲註 2 富田論文を参照。
- 26) 富田正弘「杉原紙系統の系譜―御教書杉原から奉書紙へ―」『和紙文化研究』23, 2015。
- 27) 『福井県史』資料編 6 中・近世四では宛名人を「木村隼人佐」とするが、原本にて確認したところ、「隼人佐」とすべきと判断した。
- 28) 「木村隼人佐」については、前掲註 27 と同様。また、読点及び傍線を追加して付した（以下同）。
- 29) 『福井県史』資料編 6 中・近世四では宛名人を「野辺（「四」脱力）郎右衛門尉」とするが、原本にて確認したところ、「野辺即右衛門尉」とすべきと判断した。
- 30) 『福井県史』資料編 6 中・近世四ではこの文書の差出書を「服部土佐守正栄（花押）」とするが、原本にて確認したところ、「服部土佐守正（<sup>（宗脱力）</sup>花押）」とすべきではないかと思われる。
- 31) 前掲註 6 内田穰吉「十六世紀から二十世紀へ：ある小土豪の盛衰」。また、前掲註 5 高埜利彦「近世中期における商業経営の変質」144 頁に「内田吉左衛門氏系図」が掲載されている。
- 32) なお、前掲註 5『福井県史』資料編 6 中・近世四や前掲註 21『福井県史』通史編 3 では、「木村隼人佐」や「木村常陸介」については人物を比定していない。
- 33) 前掲註 5『福井県史』資料編 6 中・近世四, 529～556 頁。
- 34) 前掲註 5『岡本村史』81～84 頁。